

明治家 実業列伝(25)

金須松三郎

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



仙台の金満家

「金満家」という語があります。「富豪」「大金持ち」を指す言葉ですが、「成り金」、「金に糸目をつけない浪費家」といったマイナスのニュアンスを含むことが多いようです。しかし、かつてはマイナスのイメージはなく、「たくさんの財産を持った人」という言葉だったようです。そして明治時代の仙台には、衆目が一致する「金満家」がいました。その人の名は、金須松三郎といえます。

松三郎は、天保十四(一八四三)年に生まれました。父の治定は三〇九石取りの中級の仙台藩士でしたが、欽斎の号を持つ文化人としても知られていました。郁三郎とも称した松三郎は、父の血を引いてか、幼少の頃から才覚をあらわし、若くして仙台藩の藩校・養



明治二十年に開業した当時の仙台駅。鉄道や駅の建設に金須松三郎は多額の資金提供を行った
(「名勝絵入改正仙台明細図」仙台市博物館所蔵)

賢堂の礼法教師に抜擢されています。

同時に松三郎がその才を発揮したのは、理財の分野でした。明治の世になって家を継いだ松三郎は金融業を営み、またたく間に多大の富を築き挙げました。明治十五(一八八二)年に出版された『宮城人物見立一覽表』には「金満家」として松三郎の名前が記されています。同じ年に出された仙台の長者番付でも、古くからの豪商とともに、松三郎の名は上位にランクされていました。

積善の人

三〇代にして仙台でも有数の財をなした金須松三郎は、貯めこむ一方の人ではありませんでした。西南戦争の時には、従軍できなかつたために銃や弾丸を国に献上し、また明治二十(一八八七)年には、海防費として一万円を献金しています。現在の貨幣価値では、何と一億円前後に相当する額なのです。

松三郎が財を投じたのは、国家的なことばかりではありませんでした。銀行設立、電気事業や鉄道建設といった仙台の近代化に関わる多くの分野に松三郎は多額の資金を提供しています。一方、若者への学資の支援、設立間もない日本赤十字社への加入など、慈善家としても、その名は広く知れ渡っていました。また松三郎は、人格者としての評価も高かったようです。その交際範囲は広く、温厚な人柄で、人と争うこともなく、まるで殿様のような「長者」と評されました。金融業で

大きな成功を得る場合、えてして人の恨みをかう場合もありますが、松三郎に関しては、そうしたことも少なく、逆に「積善」の人と評されることもあつたくらいでした。

このように人望を集めた松三郎は、明治二十二年に仙台市ができた際には、市政の執行機関であつた市参事会の会員に任じられました。翌年には県会議員に選出され、また同年に国会が開設されると多額納税者として貴族院議員に推されています。

近代化の燃料

明治二十七(一八九四)年三月二十日、金須松三郎は肺の病のために亡くなりました。まだ五二歳、当時の新聞は、こぞつてその早すぎる死を惜しみました。

しかし、その後、金須松三郎の名は、仙台の近代史の中から次第に忘れ去られていきます。確かに、松三郎は何かの事業を先頭に立つて主導したわけではなく、また大きな会社の重役に納まるわけでもなく、後世に残した肩書きは、貴族院議員、県会議員程度でした。事業で積み重ねた財産を、惜しげもなくさまざまな事業に投じた松三郎は、仙台の近代化を押し進める動力の燃料のような役割を果たしたと言つてもよいのかもしれませんが。

最後に、松三郎に直接関わることではありませんが、一つのエピソードを紹介します。松三郎が亡くなって八年後の明治三十五年、松三郎の息女である松代が、日比谷大神宮で結婚式を挙げ、帝国ホテルで披露宴を行いました。これは日本初の神前結婚式とも言われています。近代化の中で結婚式のあり方も変わってきますが、これもまた金須松家が近代化の中で果たした一つの役割だったと言えるかもしれません。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/株式会社宮城教育書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



芭蕉の辻にあった七十七銀行本店は、明治36(1903)年に建てられたドーム型の近代的な建築であった。その後、昭和16(1941)年には日本銀行の仙台支店となった。